

拝啓 3月もはや下旬、今年は3月になって急に暖かくなったせいか、桜の開花が早く、はや満開になりました。お変わりございませんか。いつもエンカウンターをお読みいただきありがとうございます。近所の公園では、こぶしが満開でしたが、もう枯れかかっています。れんぎょう、ゆきやなぎ、ちんちょうげ、こぶし、モクレン、さくらなど、一年で最もにぎやかに花の咲く時期です。

今月は、小西先生の「ローマ人への手紙講解説教」からの引用の第11回目です。ロマ書8章から10章のあたりです。「信仰とは先生の真似をすること」という見出しを付けた1節がありますが、本当にそう思います。私は、小西先生の真似をしたい。学生時代以来、50年間、小西先生の教えに従ってきて、間違いはありませんでした。

岩波ブックレットで発行されている、『内村鑑三を読む』（若松英輔）という本を読んで、大変感銘を受けました。この本は、内村先生の「キリスト信徒の慰め」と「後世への最大遺物」と「代表的日本人」のエッセンスの紹介です。これら3冊の本は、いずれも内村先生の本の中で大変有名な本ですが、著者（若松英輔氏）は、これらの著作、講演の初出は、1893年から1895年、内村先生が、33歳から35歳まで、しかも大坂、熊本、京都と転々と暮らしていた最も貧窮されていた時の作品である、と指摘をしています。そうであったかとお新発見のように感じました。

この頃の内村先生の主な著書の発行年を調べてみますと、
1893年（明治26年）2月（33歳）「キリスト信徒の慰め」

〃 8月「求安録」

1894年（明治27年）7月（34歳）「後世への最大遺物」講演（箱根）

〃 11月「Japan and Japanese」（1908年 Representative of Japan と改題）

1895年（明治28年）5月（35歳）「How I became a Christian」（警醒社書店）

生活に最も困っていた時代に、後世に残る大作品が生まれているわけです。

昨年のシンポジウムの記録の本を出版するための編集作業を手伝っておりますが、その中の樋野興夫先生の講演に、ご自分の信仰経歴として、南原 新渡戸 内村 矢内原という順番を書いておられました。私の場合、矢内原 南原 内村 新渡戸ということになります。内村鑑三、新渡戸稲造、南原繁、矢内原忠雄という4人の著作から学ぶということが大切なんだなあということを強く感じました。この4人は、重なりながら、少しずつ中心が異なるからです。

花のきれいな時期がやって来ました。どうぞ、お身体ご自愛のほど、祈り申し上げます。

敬具

平成25年2月23日

山口周三

エンカウンターのお読者各位